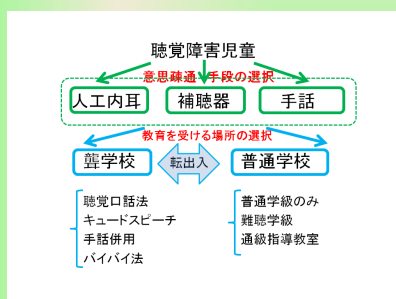


聴覚障害児童の学力に関する調査研究

1. なんのための研究？

聞えなくなったお子さんは、①**意思疎通手段** (日本手話、日本語対応手話、補聴器・人工内耳を通じた口話など) や、②**教育を受ける場所** (普通学級、難聴学級、通級指導教室、聾学校など) といった二つの面で大きな選択をしなければなりません。



また、「**9歳の壁**」問題として知られているように、聾学校に通う児童の言語力や学力は小学校中～高学年の水準で伸び悩むことが知られており、児童の言語力や学力の向上が教育上の課題になっています。

したがって、(1)聴覚障害児童の学力に影響が認められる諸要因の解明と、(2)児童の状態に応じてどのような教育方法が有効であるのか分析することを通じて、聴覚障害児童教育の改善や学力の向上に役立てていくことを研究の目的としています。

2. 研究のポイントは？

- 児童の学力に影響を与える要素として、
- (1) **児童の身体状況** (年齢、聴力、補聴器・人工内耳の使用状況など)
 - (2) **家庭環境** (家庭内での口話使用状況、読書時間、親の所得・学歴など)
 - (3) **教育環境** (高校までの教育歴、普通学級での配慮の有無、学習時間など)
- の三つの側面に注目して分析を行います。

これらのポイントを押さえた質問紙を作成し、聴覚障害児童の保護者が在籍する団体の協力のもとで郵送アンケート調査を実施しました。
…対象389名、回収156通(回収率40.1%)、有効回答数106通。

※普通学校に通う小5～高3の児童を対象。

3. これまでの研究成果

アンケート調査を統計的に分析した結果、**普通学校に通う児童(普通学級のみ利用、難聴学級利用、通級指導教室利用の児童)**について以下の4点が明らかになりました。

(1) 学校外での学習時間の多い児童ほど成績が良い傾向にある。

(2) 普通学級での配慮(要約筆記や資料の事前配布)を受けている児童の方が配慮を受けていない児童よりも成績が良い傾向にある。

(3) 手話を使用していない聾学校幼稚部及び普通幼稚園出身の児童の方が手話を使用している聾学校幼稚部出身の児童よりも成績が良い傾向にある。

(4) 残存聴力の良い児童ほど成績が良い傾向にある。

この他、児童の成績と無相関ないし低相関であると考えられる要因として、①親の所得、②母親の教育年数、③塾・通信教育の有無、④人工内耳装用の有無、⑤家庭内での口話の使用割合、などがありました。しかし、今回の調査はサンプル数が少ないという問題があるため、正確な結果を得るためにも、今後補完的な調査研究が必要とされています。

4. 今後の課題

聴覚障害児童の教育に関する調査研究を引き続き行ない、①児童の聴力や補聴手段と教育効果の関係、②教育と学力の経年変化の関係、といった点を明らかにすることで、日本の聴覚障害教育に役立てていきたいと思っています。

当面は、以下の二つの調査を検討中の段階です。

- (1) 普通学校に通う児童についての追跡調査
- (2) 聾学校に通う児童の学力調査

